

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

5月 1日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 3章19後半～35  
「解放してくださる方」

この家は、カペナウムのペテロの家だったようです。イエス様のもとへ群衆が押し寄せて来ました。イエス様の家族は、イエス様が普通ではないと思い取り押さえようとするほどでした。律法学者たちはイエス様を、悪霊につかれていると非難しました。イエス様は次のようにおっしゃいました。国も家も内輪もめをしては成り立たない、悪霊が悪霊を追い出すだろうか、「強い人」すなわち悪霊は、人間を罪と死の奴隷にし「家財」のように閉じ込めている、この人を解放するには、強い人を縛り上げる必要がある、わたしが悪霊を追い出すのは、悪霊よりもはるかに強いのだ、と。そして、故意に聖霊の働きを否定する者は許されないと、厳しく言われました。

5月 2日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 4章1～20  
「信仰によって」

海べとは、ガリラヤ湖のことです。イエス様はガリラヤ湖に舟を浮かべて、岸辺からなだらかに続いている丘に集まった「おびただしい群衆」にお話になりました。これはみ声がよく響く自然の聴衆席でした。有名な種まきの譬えて、四種類の土地が出てきます。やわらかく耕された畑に蒔かれた種は、よく育ち、何十倍もの実を結びました。種は神様のみ言葉です。畑は人間の心を表しています。イエス様はこの譬え話の解説のはじめに、12節で、イザヤ書のみ言葉を引用して、神様のみわざを見ても、神様のみ言葉を聞いても、柔らかな心で信仰によって受け入れなければ、悟ることができず、豊かな実を結ぶことができないことを警告なさいました。

5月 3日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 4章21～34  
「神の国の福音」

ここには4つの譬が語られている。前半の25節までには、神の国の福音に耳を傾けることが強調されている。まずイエス様は「あかり」の譬を用いて、隠れている神の奥義も、真剣に求めれば必ず悟ることが出来ることを教えた。次に「はかり」の譬を用いて、神の恵みを真剣に求めるものに、その恵みが増し加えられることを教えた。26節以降には、「成長する種」と「からし種」の譬から、神の国の姿を語られた。第一は、神の国が、この種のように、人間の思いや力の及ばないところでどンドン発展していくということである。第二は、

神の国は、地上のどんな種よりも小さいからし種が、どの野菜よりも大きくなるように、ガリラヤ出身の弟子たちの小さな集団から始まったが、世界中のどの国よりも大きくなっていくという事である。

5月 4日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 4章35～41

「なぜ信仰がないのか」

イエス様が弟子たちと一緒に舟に乗り、ガリラヤ湖の向こう岸に渡ろうとされた時、激しい嵐に見舞われた。この嵐はガリラヤ湖の四方が山に囲まれているという特有の地形からくるものだ。弟子たちの中には、ガリラヤ湖で漁師だった者がいたにもかかわらず、あわてふためき動揺した。彼らは舟の舳の方で眠っておられたイエス様に対し「わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と非難して叫んだ。するとイエス様は起きあがり、「静まれ、黙れ」と言って、この嵐を一言で静められた。イエス様が、自然界をも支配するお方であることを示された奇跡だ。この出来事は人生の厳しい嵐を乗り越えるにも、イエス様に対する「信仰」が必要であることを私たちに教えてくれる。

5月 5日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 5章1～20

「レギオンからの開放」

イエス様たちがガリラヤ湖の向こう岸に着くと、墓場をすみかとしている人が出て来ました。彼はけがれた霊につかれ、足かせや鎖を砕きひきちぎり、石でからだを傷つけ奇声を上げていました。彼はイエス様を拝し「…わたしを苦しめないでください」と願ったのです。彼を拘束しているけがれた霊「レギオン」が底知れぬ所に追いやられるのを恐れて発した言葉でした。レギオンとは四千から六千の軍団を意味します。しきりに願ったので豚にはいり込むのをお許しになりました。二千匹あまりの豚はがけから海へ駆け下りおぼれ死にました。ほかの人にも、本人にもどうにもできないでいるこの人を、イエス様は本来の姿に立ち返らせて下さいました。

5月 6日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 5章21～43

「恐れることはない。ただ信じなさい」

今朝は長い箇所ですがゆっくり交読しましょう。イエス様は舟で向こう岸へ渡られユダヤへ戻って来ました。すると会堂司ヤイロが足元にひれ伏し、死にかかっている幼い娘に手を置いて助けて下さいと願いました。イエス様は一緒に出かけ、群衆もイエス様に押し迫りながらついて行きました。この群集に十二年間も病気で苦しんでいた女の人がまぎれ込み、うしろからイエス様のみ衣にさわりました。彼女は多くの医者にさんざん苦しめられ、持ち物をみな費やし

でも悪化していたのです。み衣にさわれば治していただけたと思った彼女にイエス様は「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言ってくださいました。そうこうしているうちにヤイロは娘の死を知りましたが、イエス様は「恐れることはない。ただ信じなさい」とおっしゃり、娘を生き返らせてくださいました。

5月 7日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 6章1～13

「イエス様の伝道方法」

イエス様はガリラヤ伝道の初めにも故郷のナザレに行かれました。その時人々は受け入れませんでした（ルカ 4：16～30）。しかし、再び故郷のナザレにお出でになって会堂で教えられました。すると、そこに集まってきた人々は、幼い時からよく知っている大工の息子に、どうしてこんなに知恵や力あるわざが出来るのかを驚き怪しみ、イエス様の教えを聞いても信じませんでした。しかしイエス様は、呟いたり嘆いたりせず、「付近の村々を巡りあるいて教えられた」（6節）のです。どんなことがあっても、なんとしてでも伝道していく、これがイエス様の伝道方法でした。そしてバーネット先生から引き継がれた、私たち福音伝道教団の伝道方法です。この魂に対する愛のゆえに、イエス様は12弟子たちを伝道旅行に遣わされたのです。

5月 8日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 6章14～29

「バプテスマのヨハネの死」

12人、6組の伝道チームが各地でその奉仕を始め、大きな成果をあげるようになると、彼らの先生であるイエス様に注目が集められた。聖書注解者ベンゲルは「霊的なニュースが一番遅く伝わる宮殿の中まで、イエスの名前は伝わっていた」と言っている。人々は無責任に、イエス様のことをエリヤの再来だとか、素晴らしい預言者などと言っている。当時のメシヤ待望の現れである。しかし、イエス様の噂を聞いて動揺する者もいた。ガリラヤの国主ヘロデである。彼はバプテスマのヨハネを殺害した男であり、このことで良心の責めを感じていたからである。そのためイエス様のことを聞いて不安になり、「私が首をきったあのヨハネがよみがえったのだ」（16節）と言っていた。人はたとい王であっても罪の前には惨めな存在なのである。

5月 9日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 6章30～44

「五つのパンと二匹の魚」

イエス様も弟子たちも忙しくしていて食事をする暇もないほどでした。イエス様は、人を避けて寂しい所でしばらく休みなさい、と言ってくださいました。

彼らが出かけると、人々はそれを見つけて先回りをしました。飼う者のない羊のような群衆をイエス様はあわれみいろいろ教えてくださいました。遅くなったので弟子たちは食事のために群衆を解散させようとしたのですが、イエス様は五つのパンと二匹の魚を祝福して、弟子たちに配らせました。男の人だけでも五千人が満腹し、しかも残りは十二のかごにいっぱいになりました。弟子たちはイエス様の働きに加えていただいて、イエス様のすばらしさと人々の喜びに共に与らせていただいたのでした。

5月10日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 6章45～56

「逆風と荒波」

イエス様は弟子たちを舟に乗り込ませてベツサイダに行かせました。ご自分は群衆を解散させ、お一人で祈るために山に向かいました。夕方頃、舟はガリラヤ湖の真ん中に出ていて、逆風に悩まされ弟子たちは漕ぎあぐねていました。夜明け前にイエス様は湖の上を歩いて近づかれましたが、弟子たちは幽霊だと思って叫び声をあげたとあります。弟子たちの中にはガリラヤ湖で漁師をしていた人たちもいました。彼らが一晩中翻弄されたのですから、大変な逆風と荒波だったと思われます。また漁師だった人々が大声を上げて恐れたほど、彼らは心底恐れと驚きに圧倒されたのだと、想像します。イエス様は舟に乗り込んでこの逆風を静めてくださいました。

5月11日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 7章1～13

「人の言い伝えとイエス様の教え」

各々の地方で、様々な言い伝えや慣例がある。それらはもともと意味がないにもかかわらず、その形式だけを行うように強制される事が多い。エルサレムにいる権力者たちは、ガリラヤにおけるイエス様の働きを何とかして芽のうちに摘み取ってしまいたいと、攻撃の材料を鵜の目鷹の目で捜していた。だから彼らは、弟子たちのうちの何人かが、不浄の手でパンを食べていたのを見て、「昔の人の言い伝えに歩まない」（5節）とケチをつけた。しかし、イエス様はこの7章で、鋭い適切な表現をもって、人の言い伝えと神の戒めを解き明かし、神の真理と人間の真実について教えられた。私たちの周りにも、何だかわからない伝統等があって、それに縛られてしまう事があるから気をつけよう。

5月12日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 7章14～23

「心から出るものが人をけがす」

イエス様は、言い伝えなどが導く欺瞞について律法の専門家たちをすどく指摘した。その後イエス様は、「すべて外から人の中にはいって、人をけがしうる

ものはない」(15節)と言われた。レビ記11章には、けがれた食物のリストが掲げられている。シリアの王エピファネスは、ユダヤ人を根絶やしにしようと豚肉を彼らに食べさせる策略をたてた。すると予想通り、彼らは汚れたものと定められている豚肉を決して食べず死を選んだ事がある。だからイエス様のこの言葉は、彼らを激しく怒らせた。しかしイエス様は人がその腹の中に入れるものは人を汚さないといったばかりではなく、さらに「人から出てくるもの、それが人をけがすのである」(20節)と言われた。そこで心の中から出て人をけがすもの12種類を列挙された。

5月13日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 7章24～37

「ツロ、シドン、デカポリス」

イエス様はガリラヤ湖の北西の異教の地、ツロ、シドンに向かいました。その後、ガリラヤ湖の東南のデカポリスを通って再びガリラヤ湖畔にお戻りになりました。ツロの婦人について「女よ、あなたの信仰は見あげたものである」とマタイ福音書15章でお褒めになっていらっしゃいます。シドンでは、かつて神様はエリヤを用いて、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えないという奇跡によって、シドンのザレパテに住む親子を飢饉の間、養っていただきました。また、デカポリスはギリシャ語を話す人々の移民の町で、ギリシャ文化の中心地でした。このように、イエス様はユダヤだけでなく異邦の民が住む町々村々をも訪れてくださったのでした。ガリラヤに戻ったイエス様は、耳の不自由な人を癒してくださり、彼の耳は開け、舌のもつれが解かれたのです。

5月14日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 8章1～10

「七つのパンと小さい魚」

男の人だけで五千人の人々を養った奇跡に続いて、ここには男の人だけで四千人の人々を養った奇跡が記されています。大勢の群衆は三日間イエス様と一緒にいて、お話を聞きました。この近隣でなく遠くから来ている人々もいました。手元にあったのは七つのパンと小さい魚が少し。イエス様はこれを祝福して用いていただきました。食べた人々は満腹し、残ったパンくずは七つのかごにいっぱいになりました。ヨハネ福音書のように、人々は、イエス様は飢えを満たす方、と誤って受け止め、イエス様を追いかけるのです。「命のパンである」(ヨハネ6章35節) イエス様に、人々の目が開かれるのは容易ではありません。ダルマヌタの地方とは、この箇所だけにだけ出てくる地名でガリラヤ湖畔西岸の一地域と考えられるようです。マタイ福音書15章にはマガダンと出ています。

5月15日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章11～21

「二つのパン種を警戒せよ」

エルサレムからやってきたパリサイ人は敵意に満ちていた。彼らはイエスに、もしあなたが本当にメシヤなら、そのしるしを見せるように要求した。「天からのしるし」は、神から遣わされたメシヤであることを示す証拠のことである。彼らはイエスがメシヤであるという噂が民衆の中に定着することを恐れて、本当にメシヤであるならばその証拠を見せるように詰め寄った。またガリラヤ湖の向こう岸に渡ろうとしていた船の中では、イエス様は弟子たちに「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と戒めた。パリサイ人のパン種とは偽善のことで、ヘロデのパン種とは世俗的、肉欲的な快樂主義のことである。そして現在も、キリスト教会が最も警戒しなければならない事は、この二つのパン種ではないだろうか。

5月16日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章22～30

「わたしをだれと言うか」

ここには二つの記事が記されている。一つは盲人の癒しで、もう一つは、ペテロの信仰告白です。イエス様は、ガリラヤのベッサイダにおいて、ひとりの盲人を癒したばかりではなく、彼の手を取り、村から連れ出し、一対一になって、心と心の出会いを彼に体験させ、彼の心の目をあけてあげました。それからイエス様は、ピリポ・カイザリヤに行く途中、「人々は、わたしをだれと言っているか」と尋ねました。弟子たちは人々が「バプテスマのヨハネ、エリヤ、預言者のひとり」だと言っていると告げました。するとイエス様は「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねました。これは私たち一人一人に対する重大な質問です。ペテロは、聖霊の導きで「あなたこそキリストです」と告白しました。では、あなたは何と応えますか？

5月17日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章31～38

「自分の十字架を負って」

人々は死刑囚がこれから死刑にされるために、自分がつけられる十字架を背負って刑場に向かう姿を見ました。イエス様は罪のない神のひとり子であるにもかかわらず、同じようにゴルゴタに向かって十字架を負って歩まれました。すべての人の救いのために歩まれた十字架の道は、父なる神様から与えられた、イエス様の最大の使命でした。イエス様のほかに誰がこの使命を果たすことができるのでしょうか。誰も代わることはできません。そしてイエス様が十字架を負って歩み十字架で死んでくださったので、信じる者の救いが完成したのです。私たちはイエス様を信じ、他の人には代われない、神様が与えてくださった生

きるべき道を歩むとき「魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負  
いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタイ 11 章 29、30) ということを知  
るのである。

5月18日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 9章1～13

「栄光の御姿」

神の国の力の到来を垣間見た三人の弟子はペテロ、ヤコブ、ヨハネでした。「高  
い山」とはパレスチナ北部のヘルモン山と推定されるようです。神様はシナイ  
山でモーセに十戒を刻んだ石の板を与えました。エリヤは旧約時代を代表する  
預言者です。この二人がイエス様と一緒に語っていたのです。しかし、二人の  
姿はやがて消え、そこにはイエス様だけがおられました。イエス様は十字架で  
お死になられますが、栄光に輝く御姿で三日目に復活なさいました。十字架の  
苦難と死の後に、栄光と勝利の御姿を明らかにしてくださいました。「これはわ  
たしの愛する子である。これに聞け」という御声のとおり、永遠に栄光を受け  
られる方です。

5月19日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 9章14～29

「信仰と不信仰の狭間で」

山の上で、素晴らしい栄光が示されていた時、麓では不信仰を象徴するような  
事件が起きていました。山の麓に残った弟子たちのもとに、ある父親が悪霊に  
つかれた息子を連れて来ました。弟子たちは悪霊を追い出してあげてくれること  
を引き受けたようです。彼らは前に全国伝道に派遣された時、奇跡を行った実績が  
あるので、自信を持っていたのです。ところが今、彼らはその力がありません  
でした。この噂を聞きつけて、群衆と律法学者とが飛んで来ました。イエス様  
に対するまたとない攻撃材料が手に入ったからです。こうした中で、悪霊につ  
かれていた息子をどうしても治して欲しいと願った父親の中に、イエス様との  
会話で、真の信仰が生れていったのです。

5月20日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 9章30～37

「一ばん偉いのはだれ？」

イエス様はカペナウムに向かう途中、弟子たちに2度目の受難と復活の予告を  
されました。しかし彼らはイエス様の言われたことを悟ることができませ  
んでした。人は誰でも、いくら説教で十字架のお話を聞いても、イエス様を受  
け入れるまではこの奥義を悟れないのです。弟子たちは、イエス様の受難と  
死と復活について悟れないばかりか、カペナウムに向かう途中に、「誰が一番  
偉いか」と論じ合っていたのです。あの素晴らしいヘルモン山での経験と、そ  
れと対照

的に山の麓でのみじめな失敗がそのきっかけだったのでしょう。アウグスティヌスは「高慢はすべての罪の本質である」と言いました。しかし、十字架のもとにひざまずいて主を仰ぎ望む者は、高ぶりとうつろから救い出されるのです。

5月21日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 9章38～50

「ひきうすと塩」

他の人をつまづかせることが、どんなに大きな罪か、「ひきうす」とは、ロバがひく大きな石臼で、これを首にかけられて海に投げ込まれるほうがはるかによい、と言われるほどです。また、自分をつまづかせるものを取り除いてどんな犠牲を払っても、永遠の命をいただくほうが大切だ、とされています。体の一部である手を、あるいは足を切り捨てるという、激しい表現がなされていますが、手を動かし罪を犯させるのは心ですから、たとえ手を切っても根本的な解決にはなりません。しかし、それほど真剣に、心の罪を神様の前に謙遜に素直に認めて、罪をお詫びしキリストの十字架の血によって赦し清めていただくことが大切なのです。塩は食べ物の腐敗を防ぐ作用をします。同様に、清い心と生活を求めて自分自身に厳しく、しかし周りの人には優しく平和に過ごすようにと教えてくださったのです。

5月22日 今日に通読箇所 ヨブ記 17章

「墓が持っている」

ヨブのような場合に、その思いと言葉をしばしば死が横切るのは当然だ。もともと「死を思う」のは、すべての人間に共通のものなのだ。「望むのは私の生き甲斐だった。この頃は若い時分と違って、望めないものを望むのはやめて、望めそうなものを望んでいた。だが今はその望みもすてる」これは死にのぞんだ高見順の詩だが、やがて誰にもその日が来る。

5月23日 今日に通読箇所 ヨブ記 18章1～15

「悪しき者の運命」

ヨブの言葉はビルダデにとっては「神から罰を受けるのは罪人だ」という、根本真理がよくわかっていない言葉のように受け取られる。そこでこの大前提、大原則を認めさせるところから、議論を立て直そうというわけだ。これはヨブとは噛み合わない議論だったが、我々などは案外、この知れ切った大原則について気持ちも生活もズレ易いから、今くり返し、この章を学ぶ必要があると思う。

5月24日 今日の通読箇所 ヨブ記 19章9～29

「我をあがなう者は生く」

ヨブは友達や世人の評価でなく、神による永遠の評価、裁きに望みをおく。ヨブの生涯とその苦難、またヨブの信仰の言葉、悲しい言葉、疑問の言葉が、すべて碑に刻まれて記念されるようにヨブは求めている。終末の日に神によってすべては明らかにされ、ヨブにも納得がゆくだろう。そして「神と知己」であることが、その時のヨブの喜び、栄光となるだろうと。

5月25日 今日の通読箇所 ヨブ記 20章1～17

「腹の中の毒」

からし蓮根はおいしいものだが、中に人の神経を犯すボツリヌス菌、などが入っていてはたまらない。「たとい悪は口に甘く、口の中に含んでも、彼の腹の中で変り、毒蛇の毒となる」とあるように、しばしば罪もまたおいしいので、ついうっかり楽しんでいると、その中にしかけられた悪魔の毒は、我々を苦しめ台なしにして、最後には滅亡に追いやってしまうのだ。その味に魅せられないさきに、罪を避けるのが、まず賢明というものだろう。

5月26日 今日の通読箇所 ヨブ記 20章18～29

「がき」

仏教で教える地獄の中に「がき道」という場所がある。ここに落とされた死者は、いつも飢えに苦しんでいる。ところがここには食物がないわけではない。いくら食べても飢えに苦しむのがこの死者の問題なのだ。「彼の慾張りは足ることを知らぬゆえ、その楽しみは何物をも救うことができない」とここに言われているように、死者でなくても、繁栄とぜいたくの日本にも、場合によっては「がき道」が出現するのである。

5月27日 今日の通読箇所 ヨブ記 21章6～26

「悪人の繁栄」

ヨブの場合のように、神様は、信じ従う者に対して、時々苦しいつらい試練を与える。そういう時の寂しい心境には、神様を信じない気楽な罪人の方が、むしろ安逸と繁栄を楽しんでいるように見える。しかし「神のひき白はゆっくりまわっているようでも、必ず中のものを砕き、神の網の目は大きいようでも最後にはすべての魚を捕える」のは真理だ。我々は試みの日に出会っても、感傷的な不信仰に落ち入らないようにしよう。

5月28日 今日の通読箇所 ヨブ記 22章1～20

「弱い者いじめ」

人は自分が思いこんだことを、なかなか改めることができない。だから話というものは食い違いが多く、時間をかけてもなかなか噛み合わないのだ。エリパズは「正しい者が神の祝福を受け、罪人が神の罰を受ける。ヨブは神様から罰を受けているのだから罪人だ」という単純な三段論法から一步も動けない。勢いのおもむくところ、観念的にヨブを罪人あつかいにする。この章のエリパズの言葉など特にひどく、これではまるで弱い者いじめだ。

5月29日 今日の通読箇所 ヨブ記 22章21～30

「神と和らげ」

「あなたは神と和らいで平安を得るがよい。そうすれば幸福があなたに来るでしょう」とは、たとえエリパズの口から出た言葉であっても真理だ。すべての人はこの真理に従うならば幸福を経験するだろう。それには「全能者に立ち返っておのれを低くし、あなたの天幕（家庭、あるいは生活）から不義を除き去る」ことが必要だ。この章は人が救われて神の祝福を経験するまでになすべき、入信のプロセスを、たくみに書き出している。

5月30日 今日の通読箇所 ヨブ記 23章1～17

「彼を尋ねて会いたい」

ヨブの場合における神の態度を、ある神学者は「神の沈黙」と表現した。ヨブが祈ってもその苦難から解放されることなく、ヨブが叫んでも、その苦難の意味について、神からの説明はない。神様はヨブの祈りにも、ヨブの友人たちのひどいヨブ批判にも、ただ沈黙して放置し給うかのように見える。この中でヨブの「どうか彼を尋ねてどこで会えるかを知り、そのみ座に至れるように」という、その祈りは悲痛だ。

5月31日 今日の通読箇所 ヨブ記 24章1～20

「らちの明かない裁判」

「権力者の無法、裁判のひきのぼし」と言って、ハムレットさえ裁判の遅延を、生存の苦痛のひとつに数えている。ヨブは正しい者が苦しみ、悪い者が繁栄する、いわゆる「悪しき世」に対して「神の裁きの日は定めてないのか?」と、神の裁判の遅延をもどかしがっている様子である。しかし神は言い給う「もうしばらくすれば（主が）お見えになる。遅くなることはない（ヘブル10章37）」と。それが「主の日」すなわちクリスチャンの待ち兼ねている「神の裁きの日」なのだ